

出西公民館講演（平成 24 年 9 月 12 日）

## 童謡・絵本に聞くいのちの教え

江角弘道

### I. やさしく平易な言葉に宿る力

やさしい言葉には、深い意味そして大きな力が宿っていると思えます。

例えば、「ありがとう」というやさしい言葉も深い意味があると思えます。英語ならば「サンキュー(Thank you)」が該当しますが、実際にはニュアンスが少し違ってきます。人が、何かをしてくれたことに対して「ありがとう」と言うときには、「サンキュー」と同じように人に感謝するの意味で使えますが、例えば、「いいお天気で、ありがたい」というような場合には、人以外の存在に感謝しています。英語圏でこうした言い方をすると、「誰に対してサンキューと言っているのか」と質問されます。「ありがとう」以外にも、外国語では直訳できない日本語がいくつもあります。例えば、「いただきます」は、料理を作ってくれた人への感謝の言葉としての使われ方をしていますが、実は動植物の命をいただくことに対して「いただきます」という意味があります。「いただきます」には、私たち日本人が自分の生命のために、ほかの動植物の命を「いただいている」ことを、食事のたびに意識し、感謝する言葉でもあるのです。また、「おかげさま」という言葉にも深い意味があります。これは、自分が生きていること自体が、大自然の恵みのおかげであり、人々やさまざまなものとの縁のおかげです。

さらに、「もったいない」という言葉は、環境分野で初のノーベル平和賞を平成16年（2004年）に受賞されたアフリカのケニア人女性、ワンガリ・マータイさん（1940～2011）によって、日本語のままの「MOTTAINAI」を環境を守る世界の合言葉として広めることを提唱されましたので、有名になりました。

日本では、昔から食べ物を粗末にすることや、食べ物を残すと、「もったいない」と言って注意されることによく使われました。これは、その食べ物を作った農家方、また家庭に届くまでに関わってきた人々、そして料理を行った人などのご苦労に感謝の気持ちが込められています。そして何より「大地や太陽・水」など「自然の恵み」で食べられるまでになったものへの感謝の気持ちがあるのです。まだ使える物を捨ててしまう場合にも使われました。これもまた、その物を作った方や、関わってきた方々への感謝の気持ちが込められています。物は何度でも、使える限り修理し、大切に使いました。また、使えなくなったとしても、役割を代えて別の用途で使用つまりリサイクルをしていきました。“もったいない”という日本語の根底には“ありがたい”という感謝の気持ちと、活用するといろいろなものに使える“すばらしい”という尊敬の念があるのです。このような考え方と情緒を表現する言葉は、ほかのどの国の言語にも見当たりません。

ところで、難解な言葉で書いてあるものは中身も高尚だが、やさしく平易に説いているものは低俗で中身も薄いといった考えがいまだに社会には残っています。しかし、これはまったく逆なのではないでしょうか。平易なものの中にこそほんとうに深いものは存在しているのではないのでしょうか。深いことはやさしく伝えられるべきで、やさしくかみ砕いて言えない真理は本物ではない。

シンプルなもの又は、やさしい言葉などに実は真理が宿されているようです。だから子供にもわかる童謡や絵本の中には、深い真理が含まれているものがあります。

## II. 童謡に聞くいのちの教え

童謡は、幼子へのやさしい歌であると共に、大人になって再度その童謡詩を読んでみると、大人へのメッセージを多く含んだ歌だとわかります。読む人の人生観、宗教観、宇宙観によって、広くかつ深く読める文学であると考えられます。

私は、30年間、物理学を学生たちに教育し、かつ物理学の研究・主としてプラズマ物理学をしてきました。だから、童謡とか絵本などとは全く無縁でした。ところが、平成11年12月26日に、二十歳だった娘・真理子が、無謀な飲酒運転の車に衝突され、突然に命を奪われました。遺された私達遺族は、「娘は、もっと生きて活躍をしたかったろうに、結婚もし、子供も育てたかったろうに・・・」などと思うと悲しくて、本当に無念な思いをいたしました。その悲しい悔しい思いは、13年たった今でも消えません。

悲しみの中にいた時、私はカーラジオで、野口雨情作詞のシャボン玉の童謡を聞きました。特に2番を聞いたとき、涙が出ました。それは、シャボン玉が娘・真理子のいのちの象徴であるように思えたからです。シャボン玉ひとつひとつが人のいのちに思えてきたのです。いろいろなシャボン玉があります。歌の1番にあるように高く屋根まで飛んで行き言わば天寿を全うして壊れるものもあります。出来てすぐに壊れるものもあります。二十歳で、人生これからというその時期に理不尽に殺されるその無念さは、なんということでしょう。

シャボン玉（野口雨情作詞）

1. シャボン玉飛んだ、屋根までとんだ  
屋根まで飛んで、こわれて消えた。
2. シャボン玉 消えた、飛ばずに 消えた  
生まれて すぐに、こわれて 消えた  
風 風 吹くな、シャボン玉とばそう

それにしても、この童謡の内容の深さは、「野口雨情さんが幼い娘を亡くされる」という悲しい体験を歌ったものだと調べてわかりました。歌詞にはシャボン玉で子どもが遊んでいる様子が描かれています。それには夭逝した子供への鎮魂の意があります。悲しい・無念なのは、私達だけではないのです。そう思うと少し悲しさが和らいできました。悲しい時に共に悲しんでくれる人がいる。そのことばがある。そうすれば悲しみは半減して行くのです。そのことばとしての童謡の詩には、いのちを教える大きな力があることが体験を通してわかりました。その後、童謡をじっくり聴いてみたり、絵本を読んできたりする中で、童謡や絵本には、子供への伝えたいメッセージがあると同時に大人へのメッセージがあることに気がつかされたわけです。今は、「大人こそ再度、童謡を歌い、絵本を読むべきである」と思っています。

まず、童謡の「ぞうさん」について考察してみます：

ぞうさん（まど・みちお 作詞）

ぞうさん ぞうさん お鼻がながいのね  
そうよ 母さんも長いのよ  
ぞうさん ぞうさん だあれが すきなよ

あのね 母さんが すきなのよ

これは、子供がお母さんに向かって「やさしいお母さん大好き」という思いで、「常にお母さんいっしょなんだ」ところの底から安心をしているところを歌っているのです。お母さんは実は如来様です。子供は、いつもお母さんといっしょなんだと非常に深い安心感を歌っています。子供が家に帰ったらまず「お母さんいる」と言います。これは実はお母さんが言わせている。如来様が言わせているのです。歌人の吉井勇は、「わが心いたく傷つき 帰りこぬ うれしや 家に 母おはします」と母の存在への深い安心感を歌っています。

私たち一人一人の中に、如来様のいのちが宿っているということは、例えば白隠禅師が坐禅和讃の冒頭のところで「衆生本来仏なり・・・」と言っておられます。私たち一人一人の中に、如来様のいのちが宿っているから、私たち衆生は、その仏さまを思い、それと共にありたいという願いが出てくるのです。この、「私たちが、如来様と共に在りたい」という願いが出てくるところは、仏さまのいのちが展開している様子なのです。

つぎの童謡の「七つの子」について、考察します。

#### 七つの子 (野口雨情 作詞)

からす なぜ啼くのからすは山に 可愛 七つの子があるからよ  
可愛 可愛とからすは啼くの 可愛 可愛と啼くんだよ  
山の 古巣へ行って見て御覧 丸い眼をしたいい子だよ

このタイトルの『七つ』という言葉が「7羽」を指すのか「7歳」を指すのかは明らかになっておらず、度々論争の種となっています。カラスは一度に7羽もの雛を育てることはなく、7年も生きたカラスはもはや「子」とは呼べないた

めです。「7歳説」への有力な手がかりとして、野口雨情(作詞者)記念館の館長である雨情の孫娘が主張する、雨情の息子(つまり館長の父親)がこの歌のモデルであり、その息子が7歳のころに作られた歌であるという事実があります。これは身内による主張であるため、説得力があるとする見方が存在します。また、7歳という年齢は野口雨情自身が母親と別れた年齢と合致することから、そこに関連性を見出す説もあります。

この歌は、愛しい子供に対して社会に喜ばれる徳の高い人間に育てて欲しいと願う親としての切なる願いが出ています。この親とはもちろん人の親でもあります。実は如来様がその背景にあると考えられます。つまりこれは如来様の願いであるわけです。「常仏護念」です。これは子育てに通ずる大切な視点ではないかと思えます。両親は子に対して「常におまえのことを思っているよ。守っているよ」というメッセージを発信し続けねばならないと思うのです。発信していないと子供が変になってくると思えます。もし問題を起こした子がいたら、なおさら親は子に対して、「常におまえのことを思っているよ。守っているよ」というメッセージを出す必要があります。それが子を立ち直らせるのだと思えます。この童謡詩は、如来様の願いが私たち一人ひとりの中に展開してきているところを歌っているのです。

次に、童謡の「故郷(ふるさと)」について考えてみます。

**故郷(ふるさと) 高野辰之作詞**

1. 兎(うさぎ) 追いし かの山、小鮒(こぶな) 釣りし かの川、  
夢は今も めぐりて、忘れがたき 故郷(ふるさと)
2. 如何(いか) に在(います) 父母、恙(つつが) なしや 友がき、

雨に風に つけても、思い出 (い) ずる 故郷

3. 志 (こころざし) を はたして、いつの日にか 帰らん、

山は青き 故郷、水は清き 故郷

この歌の1番は、過去のことを歌っています。2番は、現在のことを歌っています。そして3番は、将来のことを歌っています。この詩の中で、特に印象的なフレーズは、「志 (こころざし) を はたして、いつの日にか 帰らん、」というところではないでしょうか。この志とは、何でしょうか。これは子供達へは、「大きくなったらなんになるかということ、例えばお医者さんになりたいとか、看護師になりたいとか、その志を果たして故郷に帰って行くこと」を意味しているようです。では、大人に対してはどうでしょうか。この「帰らん」と言っている帰るところは、「ふるさと」ですが、それは実は、あの世・浄土しかないと思います。私たちが死んでゆくとき、つまり浄土に帰ってゆくときどんな志をはたして帰って行けばよいのでしょうか。これは生きてゆくうえで、大切なことだと思います。

また「帰る」ことを歌った童謡に「夕焼け小焼け」があります。

夕焼け小焼 (中村雨紅作詞)

夕焼け小焼けで 日が暮れて 山のお寺の 鐘が鳴る

お手々繋いで 皆帰ろ カラスと一緒に 帰りましょう

子供が帰った あとからは 丸い大きな お月様

小鳥が夢を 見る頃は 空にはキラキラ 金の星

「夕焼け小焼け」は、夕日の中、子供達が我が家に帰って行く情景が浮かんできます。夕焼けの空に、どこからか、お寺の鐘が響いてくると、懐かしいよ

うな、ホッとするような、なんとも穏やかな気持ちになってきます。夕焼け空には、浄土のイメージがある。落日の彼方には、浄土がある。浄土往生を願って、あかね雲の彼方に手を合わせる。そんな人の姿が、昔は、ありました。私たちは、帰っていく故郷があると知ったとき、初めて、心安らかに生きることができるようになる。お寺の鐘は「魂の故郷」を思い出しなさいと、鳴るのではないのでしょうか。「念ずれば花開く」の詩で有名な坂村真民に「安らぎ」という詩があります。

安らぎ（坂村真民作詞）

帰ってゆく処が わかっているから

あんないい顔になるのだ

あんないい目になるのだ

あんな安らぎの姿になるのだ

帰るべきふるさとをわかると言うことが本当の安心につながるのです。

葬儀の時に仏壇に置く白木の位牌には、帰元〇〇〇〇信士と戒名の上には帰元（あるいは帰空）と書きます。これは、亡き人は「元」にお帰りになった、あるいは「空」に帰られたことを意味しています。前に浄土に帰ると言っていました、これは空に帰るということもできます。私達はみな、空から生まれてきて、また、その空へと帰って行く存在なのです。なぜこんなことがはっきりと言えるかといいますと、二十歳で亡くなった娘のことをずっと考え続けていたら良くわかりました。それは良く考えてみると亡くなった娘の真理子は、私が結婚する前はいませんでした。そして私が結婚し、私達の二女として昭和54年2月8日に誕生しました。そして平成11年の12月26日に亡くなっ



たわけです。だから私が結婚する前はどこにもいなかったつまり「空」でした。そして20年間私達と過ごし、突然私達の前からいなくなったわけです。つまり「空」になってしまったのです。般若心経の中に有名な色即是空・空即是色という句があります。これを空即是色・色即是空とみると空から色へ色から空へととなります。つまり亡くなった娘は空から来てまた空に帰っていったとなります。だから私達は空から来て空に帰る存在だといえるのではないのでしょうか。つまり、私達はみな、浄土から生まれてきて、また、その浄土へと帰って行く存在なのです。空に帰る。つまりその帰るところは生まれ故郷ふるさと・浄土であるわけですね。

### Ⅲ. 冥土の土産

これまでの童謡詩の中で、「帰る」という言葉がありました。

「志を はたして、いつの日にか 帰らん、」

「お手々繋いで 皆帰ろ カラスと一緒に 帰りましょう」

仏教では「帰る」ということが非常に重要なことです。「志を はたして、いつの日にか 帰らん、」という志とはどんなことでしょうか。私たちが死んでゆくとき、つまり浄土に帰ってゆくときどんな志をはたして帰って行けばよいのでしょうか。この志がなんであるかを考えることがとても大切であると思います。この世で、私達が旅から帰るときに必ずする動作を参考に考えられます。旅から帰る時、土産を持って帰ります。だから、人生を旅だとしたら、私達が浄土へ帰るときには土産物があるということになります。仏教では、死の瞬間から49日の間は、中陰といいます。ほんとに浄土に行けるかどうか未決定な状態です。7日7日ごとに審判があるとされています。35日目には最も厳

しい裁判官である閻魔大王さまの裁判があるわけです。中陰の道行きを描いた絵（地獄極楽図と呼ぶ）が仁照寺にあります。また白隠禅師の描かれた地獄極楽図には、図1のような天秤が描いてあり、天秤に亡者が乗っていて、何かと比較されている場面がありました。



図1. 天秤上の亡者（白隠地獄極楽図）

このような天秤の絵は、仏教だけのことかと思っていたら、4000年前のエジプト文明の『死者の書』の中にも図2のような天秤の絵があり、びっくりしました。



## 図2. 天秤で審判を受ける死者（エジプト死者の書）

『死者の書(Book of the Dead)』は、古代エジプトで死者とともに埋葬されたパピルスの巻き物です。死者の霊魂が肉体を離れてから冥府の国に入るまでの過程を描いた祈祷書で、冥福を祈り死者と共に葬ったのです。『死者の書』という名称はエジプト人自身が用いたのではなく、1842年ドイツのエジプト学者カール・リヒャルト・レプシウス(Karl Richard Lepsius)がパピルス文書を『エジプト人の死者の書』と名付けて出版したことで知られるようになりました。おもに、絵とヒエログリフという神聖文字で構成されています。その中で、心臓を天秤にかける死者の裁判の章は有名です。秤の目盛りを見つめるのはアヌビス神。また、秤には真実の羽根と死者の心臓がそれぞれ乗っており、魂が罪で重いと傾くようになっている。古代エジプトでは、心臓は、個人の徳と不徳を計量することのできる唯一の臓器であるとされていた。死者の心臓が真理の羽より重ければ、罪深く不徳の人で、アメミットという魂を食らう鱈に似た怪物に食べられるとされる。真理の羽と釣り合いがとれば、オリシスの治める死後の国へ行くことができる。エジプトは多神教の世界であった。中心となる神は、古王国（紀元前2686年頃 - 紀元前2185年前後）では、天地宇宙を創造し、世界に秩序を維持しエジプトの繁栄をもたらす太陽神ラーであった。エジプトの主であるファラオは太陽神ラーの子とされ、神そのものであった。ファラオとは大きな家を意味し、日本の古代天皇のことを帝(御門=大きな門のある家に住まれる方)といった事に類似する。日本の天皇も、太陽神アマテラスの子とされた。日本も八百万の神とあって、多神教であったわけで非常に良く似ています。エジプトでは、神々の中で、オシリス神は、あの世をつかさどる神で

あった。日本では、亡者は、三途の川を渡って、此岸(しがん=この世)から彼岸(ひがん=あの世)にゆき、閻魔(えんま)大王の審判を受け、極楽に行くか地獄に行くか決まる。生前の行いがえん閻魔大王の前では隠すことができないという。たぶんこの時に亡者の土産物の内容(生前の諸行)が問題になると考えられます。私達はいつ死ぬかわかりませんので、常日頃から土産物の内容をしっかりと考えておく必要があります。死ぬときは、お金も財産も持っていきませんから、土産物の内容は、お金などで買えるものではありません。

ところで、人間の歴史には、前述のように、天、あの世、浄土、冥界、天国、いのちの根源、大いなる世界などのいわゆる「目に見えない世界」との関わりがあります。このように仕向けるものは、霊性といわれるものです。エジプトの場合は、エジプト的霊性、日本の場合は、日本的霊性と言うべきものです。日本的霊性は1万年も続いた縄文文化の時代から始まっていたと考えられます(河波昌東洋大学名誉教授)。

#### IV. 絵本からの教え

次に絵本から「いのちの教え」を聞いてみたいと思います。芥川龍之介の著作に「蜘蛛の糸」という絵本があります。次は、蜘蛛の糸の概要です。

「ある日のこと。お釈迦様が極楽の蓮池の淵から、ふと下の地獄の底をご覧になると、カンダタという男の姿が目にとまりました。このカンダタと云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございますが、それでもたった一つ、善い事を致した覚えがあります。と申しますのは、或時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、道ばたを這って行くのが見えました。そこでカンダタは早速足を挙げて、踏み殺そうと致しまし

たが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無暗にとると云う事は、いくら何でも可哀そうだ。」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございます。

お釈迦さまはそのことを思い出し、できるならこの男を地獄から救い出してやろうと、極楽の地獄の底へ蜘蛛の糸をお下しになられました。

そして、カンダタは、地獄の血の池で、目前に垂れてきた蜘蛛の糸を見て、思わず手を打って喜びます。この糸にすがりついてのぼっていくなら地獄からぬけ出せると思ったのでした。彼は早速その蜘蛛の糸を、両手でしっかりつかみながら上へ上へと登りました。途中で一休みしてふと下を見ると、数限りもない罪人たちが自分の後をつけて、のぼりはじめました。よじのぼって来るのを見て、「この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰の許を受けて、のぼって来た？ 下りろ。下りろ。」とわめきます。すると、その途端にそれまで何ともなかった蜘蛛の糸が、急にカンダタのぶら下がっているところから、ぷつりと音を立てて切れ、彼は独楽のようにまわりながら、地獄の闇の底へまっさかさまに落ちてしまいました。

お釈迦さまは、極楽の蓮池のふちに立って、この一部始終を見ておられました。やがて悲しそうな顔をなさる。極楽の蓮池の蓮は、そんなことに頓着せず、その白い花からは、何ともいえないよい匂いが絶え間なくあたりにあふれていました。」

この物語を単に勸善懲悪や悪因悪報に見てしまうと、道徳的教材になってしまいます。しかし、「自分を生かすためにはどうしても他をかえりみなくするような世界」、「他を否定することによってのみ己を生かすことができる世界」

実は、その世界こそが地獄です。カンダタは、その世界しか知らなかったのに、再び地獄に落ちてゆきました。そんな世界でなくて、「他を生きかすことによって自分も生きかすことができる世界」があるわけです。それが実は、極楽です。

「相手を生きかすことによって、自分も生きかされる」という世界が、実は「おかげさま」の世界なのです。仏教はそこを目指しています。

「3尺箸の譬え」という仏教説話があります。ある人が地獄と極楽の食事を見学しました。まず、地獄を覗きました。意外に思うのですが、山海の珍味が食卓に並んでいます。でも驚いたことに箸の長さが1メートル（3尺）もあるのです。地獄の住人は、箸が長すぎて自分の口に食べ物を運べず、困り果てて苦しんでいました。ですから、地獄の住人たちは、ガリガリにやせ細って、不平不満ばかりいっています。次に、極楽を覗きました。食事内容も箸の長さも全く地獄と同じです。それなのに地獄と違って、とても美味しそうに食事を楽しんでいました。ですから、極楽の住人達は、ちょっとメタボリックな体型をしていました。

さて、食事の内容も箸の長さも同じなのに、どうしてこのような違いが生じるのでしょうか。それは箸の使い方の違いです。地獄では、1メートルもある長い箸で、我先にと自分が食べようとするため、どうしても自分の口に入らず、食べ物は落ちてしまいます。これは、「自分を生きかすためにはどうしても他をかえりみなくするような世界」です。そこが地獄です。

一方、極楽の食事は長い箸を使って向かい側の相手に食べさせてあげようとするので、簡単に食べ物が口に運ばれてきます。これは、「相手を生きかすことによって、自分も生きかされるという世界」です。そこが極楽です。「おかげさま」

の世界です。「俺が、俺がという心」が地獄を生み出し、「相手を思いやる心」が極楽を生み出します。地獄も極楽もすべて心が作り出すものです。そこを仏教では、「一切唯心造」といいます。出雲市斐川町出身の教育者江角ヤス先生は、純心女子学園を創立し「心の教育」を行なわれました。その人の言葉に「～マリア様、いやなことは私がよろこんで～」という言葉があります。これはまさに相手を生かし、相手を思いやる心を表していると思います。

皆、自分が一番かわいいから、自分さえよければというカンダタのような心を持っています。地獄の中で極楽から垂れ下がる蜘蛛の糸を見つめるのは、一人カンダタだけではなくて、人間だれしも見つめるものなんです。その蜘蛛の糸をどのように生かすか、自分のためだけに生かすのか、他の人のためにも生かすのか。そこが非常に重要になってきます。その辺が閻魔様の前で見せる土産の内容になってくるのではないのでしょうか。閻魔大王はたぶんその割合を聞かれるのだと思っています。そして、地獄行きか極楽行きが決定するわけですね。

## V. おかげさまの生活

私達が生きているということは、まず空気がないと生きていけません。水がないと生きていけません。太陽の熱や光がないと生きてゆけません。それは、自分の手柄でどうにかするものでないですね。空気のおかげ、水のおかげ、太陽のおかげです。こうして私がお話しできることもこれは私の手柄ではありません。皆さんが聞いて下さるから話すことができる。つまり皆さんのおかげです。また、皆さんが聞こうと思っても、万事の条件が整わないとできませんね。来る途中交通事故にあったなどしたら公民館に来ることが出来なくて、聞けま

せんね。人間どんなことが起こるかわかりませんね。交通事故に遭わなかったおかげですね。皆さんが聴いて下さるには、多忙な毎日にもかかわらずおいでになるご縁が深くつながっていたからなわけだと思います。

よく考えてみると世の中すべておかげさまなのです。どんなこともおかげさまで。一体だれのおかげでしょうか。だれのおかげさまかという、それは「いのちの根源」あるいは「おおいなるもの」あるいは如来さまのおかげさまであります。

坂村真民さんは、仏教詩人として有名な方ですが、「一本の木を見つめている」というすばらしい詩があります。それを仁照寺で一番大きな木・西側にある椎の木ですが、その前に書いておきました。



この詩の中で、「見えないものを見る目を持つとう。見えないものを知る心を持つとう」とあります。実は、仏様も神様も目に見えないのですね。見えないけれどもいらっしゃいます。どこにかと言うと、今ここにおられます。そして、「私たちを養って下さっている」のです。これは、空気など目に見えない存在とよく似ています。私たちは、空気のおかげで生きていますが、空気は、善人にも悪人にもだれでも吸うことができます。そしていつでも私たちは空気に抱かれ



ています。それをあたりまえだと思って生きています。実は、それはあたりまえではなくて、奇跡的なことです。私たちは、普通に生活しているとそれが分かりません。しかし、「自分が本当に死ぬんだ」ということを受け入れることによって始めて、これまで「あたりまえ」だと思っていたすべてのできごとが、「あたりまえ」ではなくなってくるからです。つまり、自分の命が今生かされていることが、本当に有難い、奇跡的なことのように思えてきます。そして、同時にこの私を生かしているこの世界のすべてが有難く、愛おしく感じられてくるわけですね。本当に死を受け入れた人の言葉は、感動的です。医者だった井村和清さんは肺癌に侵され、死を悟った後に見えてくる光景を語っています（遺稿集「飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ」から）。

肺への転移を知ったとき、覚悟はしていたものの、私の背中は一瞬凍りました。その転移巣はひとつやふたつではないのです。レントゲン室を出るとき、私は決心していました。歩けるところまで歩いていこう。

その日の夕暮れ、アパートの駐車場に車を置きながら、私は不思議な光景を見ていました。世の中がとても明るいのです。スーパーへ来る買い物客が輝いて見える。走り回る子供たちが輝いて見える。犬が、垂れはじめた稲穂が、雑草が、電柱が、小石までが、輝いて見えるのです。アパートへ戻ってみた妻もまた、手をあわせたいほど尊く見えました。

自分の死を受け入れたとき、逆に世界がいきいきと輝いて見える。そして、この命がかけがえなく尊いものに思えてくる。すると、生き方が変わります。人生の一瞬一瞬を大事に生きるようになるわけです。たとえばご飯を食べるときも、お茶を飲むときも、人と会うときも、仕事をするときもそうです。花を見

たり、風景をみたりするときもそうです。そうした日常のすべてのものが光り輝き、有難いという感謝の心がこもってくる。すると自分が今生きていると思っていたのが、実は生かされているということが、よく分かってきます。今、あたりまえに生きていると思っていることが、奇跡的に思えてきます。

井村和清さんは、「あたりまえ」という詩を作詞されました。

あたりまえ（井村和清作詞）

こんなすばらしいことを、みんなはなぜよろこばないでしょう。

あたりまえであることを

お父さんがいる。 お母さんがいる。

手が二本あって、足が二本ある。

行きたいところへ自分で歩いていける。

手をのばせばなんでもとれる。

音が聞こえて声が出る。こんなしあわせはあるでしょうか。

しかし、だれもそれをよろこばない。

あたりまえだ、と笑ってすます。

食事が食べられる。

夜になるとちゃんと眠れ、そして又朝がくる。

空気をむねいっばいにすえる。

笑える、泣ける、叫ぶこともできる。走り回れる。

みんなあたりまえのこと。

こんなすばらしいことを、みんなは決してよろこばない。

そのありがたさを知っているのは、それをなくした人たちだけ。

なぜでしょう。

あたりまえ

仏教における合掌は、右手が仏様で左手は自分を表します。合掌することにより仏様と私がつながり心を通い合わせ、仏の存在と安心を得るのです。そして「仏様と一緒に」と考えると、心が豊かになり苦しいことも乗り越えることができるのです。

「右ほとけ、左おのれと合す手の、中ぞ床しき南無の一声」

私は、「おかげさまの合掌」という歌を作ってみました。

「おかげさまの合掌」 (江角弘道作詞)

一、おかげ～さまです 人生は 大事にしようよ この命

みんなで幸せの 両手を合わそう

この世に生まれた幸せを この世に生まれた幸せを

明るく楽しく 生きようよ

二、悲しいときには 共に泣き 嬉しいときには 分けあって

みんなで感謝の 両手を合わそう

手を取り仲良く 生きようよ 手を取り仲良く 生きようよ

おかげ感謝で 生きようよ

三、この世に生まれた 幸せは あわせた両手の中にある

みんなでおかげの 両手を合わそう

互いにうやまい 助け合い 互いにうやまい 助け合い

越えてゆこうよ あの世まで

私たちは、生活のどの方面にも「おかげさまの生活」をすることが大切となります。